

## 浄念寺蔵『珂碩上人伝記』に見える奇瑞譚

——下巻を中心に——

飯 野 朋 美

はじめに

『珂碩上人伝記』は、新潟県村上市の快樂山浄念寺に伝わる書物である。本書は既に『浄真寺仏像修理報告書』<sup>1)</sup>に翻刻がそなわる。

稿者は前稿<sup>2)</sup>において、『珂碩上人伝記』中巻所収の奇瑞譚を紹介し、『名号威徳物語』(元禄八年(一六九五)序刊)や『九品山縁起』(文化九年(一八一二)跋刊)所収の説話と比較して、その成立を文化九年以降と推定した。また、『珂碩上人伝記』の奇瑞譚には、浄念寺の寺宝の由来譚が含まれていることから、作者を越後村上藩の領内に住む者で、浄念寺と関係があり、浄土宗の唱導に関わっていた者とする仮説を述べた。浄念寺は、もともとは泰叟寺といい、珂碩は泰叟寺時代に約十年ほど住持をしたことがあった。本書が浄念寺の蔵書となった経緯は、未詳である。

本稿では、『珂碩上人伝記』下巻の各話について紹介する。その概要

を明らかにするとともに、数話を選んで叙述の方法について検討することにした。

### 一 下巻の各話

下巻の冒頭には、「此巻、珂碩上人依因縁、越後十年の御化導畢、武蔵国世田ヶ谷領奥沢の郷に境地を求給ひ、延宝六年より元禄七年迄、九品仏御移住七年の御利益の有増を書しるす」とある。本巻は、珂碩の越後村上から奥沢への移住以降の奇瑞譚、奥沢の浄真寺本堂や九品仏堂造立にまつわる話、寺宝由来譚などで構成されている。

各話は、章題があるもの、ないものが混在している。章題がない場合は、話のまとまりごとに一話と数えた。以下、まずは下巻所収話のあらすじを示す。

1 延宝六年(一六七八)、六十二歳の珂碩は奥沢に移住した。その生

活ぶりは、日々粟飯を食べ、弟子に向かって「味能き物成」と言うほど質素であった。(奥沢での珂碩の日常)

2 珂碩が奥沢に移住したことを聞きつけ、多くの者が参集した。茶屋が出るようになり、重病人は数日間逗留して十念を受けた。(門前町の形成)

3 綱吉公の御女中衆、松崎どのが発狂した。珂碩が十念を三十遍授け、本服した。珂碩は松崎どのが子沢山になる旨の予言をした。その後、松崎どのは中の丸様付きになり、四谷に住み、五十人扶持となった。子供をたくさん持った。(珂碩の予言、十念の利益)

4 「九品仏本堂造立の物語り」

珂碩は深川靈巖寺から奥沢の仮家に仏像を移した。本堂建立を望む帰依者たちは材木を寄進したが、珂碩は本堂建立には頓着せず、仏像の彫刻に精を出した。珂碩遷化後、二世珂憶は三世に林碩を定めた。九品仏の宝物の多くは珂憶からの寄付である。中でも「芝枯の名号」について紹介する。これは、六字の名号が記された布だが、虫干しの際、芝の上に広げると文字の部分だけ芝が枯れるという。(浄真寺二世珂憶の業績)

5 三世林碩の時代、江戸八官丁に住む霊庵という医者为本堂造立の勧進をするが、トラブルが続き、造立は沙汰止みとなった。尾張藩主徳川光友による造立も中止となった。珂憶は名古屋で材木を吟味し、大坂の職人を連れて九品仏堂の造立に乗り出した。(珂憶による九品仏堂造立)

6 「九品仏堂三ヶ所 釈迦堂一所」

珂憶は大坂から江戸に向け、二艘の舟に材木を乗せて運んだ。四十三艘出航した舟のうち、九品仏に関わる二艘のみが無事に江戸の高輪に着き、残りの四十一艘は破船した。この奇瑞を聞いた者たちは、珂碩上人の恵みであろうとありがたく思い、率先して材木を授け、船賃も受け取らずに江戸高輪まで運搬した。(珂碩の奇瑞)

7 「此材木高な輪より九品仏迄引取候事」

高輪に千場太郎兵衛という運搬業の男がいた。息子が病気になる。珂碩上人は、息子の病氣は太郎兵衛が牛をこき使い、車で虫を潰すせいだと言った。施餓鬼法要を執り行い、念仏を唱え、十念を授けられると、息子は全快した。以上のような奇瑞への報恩のため、高輪に着いた材木は、太郎兵衛が奥沢まで運んだ。(十念の利益)

8 和泉式部は上東門院の官女だった。十三歳で参内し、詩歌管弦に秀でていた。娘の小式部内侍が六歳で死亡したので、和泉式部は尼になろうと思ひ、旅に出た。播磨国書写山の性空上人のもとへ行き、和歌のやりとりをした。和泉式部は剃髪を願ったが聞き入れられず、熊野権現は本地が阿弥陀如来であるので、祈れば式部のような罪深い者でも利益を蒙ることができると教えられた。旅の途中、京の誓願寺の如来が、同寺での剃髪を勧めたので、尼となった。その時、和泉式部は三十一歳であった。諸国を回向してまわり、勢州山田の奥山桃庵方に身を寄せ、臨終を迎えた。(和泉式部の歌徳説話)

9 奥山桃庵家は、代々医者の家系であった。敷地内には、和泉式部の墓と言ひ伝えられる塚があった。三十八代目の桃庵は入婿で、塚の話の信じていなかった。家が衰え、江戸に出て浅草広小路に店を

借りた。生活は苦しかった。十四歳の娘が病気にかかったが、医療行為は役に立たなかった。母親は修験者に、娘の病気は先祖の祟りだと言われた。娘を駕籠で珂碩のもとへ連れて行くと、娘に和泉式部の塚の神が憑依して、仏を信じ、念仏を唱えるようにと口ばしした。施餓鬼法要を執り行い、念仏を一万遍唱え、十念を授けられ、娘は本服した。奥山家ではその後も念仏を続け、家業は栄え、富貴となった。奥山家は智証大師の真筆の掛絵を珂碩に寄進した。これは浄真寺の宝物となった。(十念の利益、宝物の由来)

10 勢州山田の鈴木弥三郎は隣家の娘と野合した。弥三郎は娘に告げずに江戸に出て、伯父の店を手伝った。娘からの手紙に返信もせず三年が過ぎた。別に店を持つことになり、嫁を迎えた。これを聴いた山田の娘は恨みに思い、病気になった。弥三郎が留守中、女があらわれた。挨拶もなく、顔を隠して弥三郎を待った。近所の若い衆が女を引き立てると、泣く泣く帰っていった。山田の娘は京参りをして、稲荷様に弥三郎夫婦を取り殺すよう頼み、帰宅後に亡くなった。弥三郎の女房が発狂したので、駕籠に乗せて浄真寺に連れて行った。女房には山田の娘が憑依していて、山田の娘を捨てて別の女を女房に迎えたのを恨みに思ったこと、木の葉に取りついてでも存念を晴らそうと思っていることなどを口ばしした。珂碩は弥三郎を叱り、娘に十念を授けた。以下欠。(十念の利益)

下巻は、内容的に大きく三つに分けられる。

1から3は、奥沢での珂碩の生活ぶりと、以前にも増して信者が参

集する様、信仰を集める様子が記されている。

4から7は、浄真寺の伽藍造立がいかに困難を極めたかについて記す。多くの人の援助と度重なる奇瑞によって、成し遂げられた事業であることに、筆を費やしている。

8から10は勢州山田と関わる話である。8は和泉式部の歌徳説話が記され、9は8を前提とする浄真寺の寺宝由来譚となっている。最終話にあたる10は中絶している。よって結末は記されていないが、珂碩が娘に十念を授けており、他の説話の型から類推して、この話の主題も十念の利益であったかと思われる。中絶の理由は未詳である。

## 二 浄真寺二世珂憶の業績

4と5は、珂碩の弟弟子で、浄真寺二世の珂憶について語られている。河内国玉手山安福寺を再興した珂憶は、実行力に優れ、華麗な人脈を持った人物だったようである。

4の「九品仏に珍敷宝物数多是あり、多くは珂憶上人より寄附のもの多し」という表現からは、珂憶の浄真寺への貢献のほどがうかがえる。また、5では「尾州随龍院との珂憶上人江御寄依有て二脈の御師範たり」と述べられている。随龍院、すなわち尾張徳川家二代光友との密な関係があったことがわかる。さらに「大坂へ御出財木を吟味し給ふに、思召の無き故に名古屋へ下り給ひて彼是と詮議し玉へ」と記されているが、単に大坂では気に入らなかったから名古屋屋に見にきたというわけではなく、光友との関わりがあったからと解

すべきであろう。

珂憶と光友との関わりについては、珂憶の伝記である『玉手圓信和尚行状』（享保四年（一七一九）安福寺藏版）<sup>3</sup>に詳しい。『玉手圓信和尚行状』は、玉手山安福寺（大阪府柏原市）を再建した珂憶の偉業を讃えるべく、弟子の珂慶が編集し、安福寺が蔵版したものである。同書には、「尾陽侯前ノ亜相源光友公、師ノ徳風ヲ聞テ、数々徴シテ接見ス」、「公素ヨリ玉手山ノ絶勝ヲ聞ヲ以テ師ニ請フテ、自ノ寿蔵ヲ山中ニ設ク。因テ脾田二千畝ヲ割ヒテ以テ食輪ヲ資ク」と記されており、珂憶が光友の援助を受けていたことがうかがえる。

### 三 憑依と口ばしり

9と10の説話は、いずれも憑依された者が神や霊の言葉を口ばしる話である。しかしながら、9と10は根本的に異なる話型である。

9は、本書中巻の6や『名号威徳物語』下巻「岩村平六娘病気物怪」と同様の話型で、<sup>4</sup>神（もしくは霊）が生きているものに憑依し、口ばしらせて弔いを願うというものである。9では塚の神の求めに応じて弔いを済ませ、珂碩が十念を授けると娘は回復し、周囲の者は珂碩の法力に感じ入る。十念の利益とともに珂碩の法力の素晴らしさを称揚している。

10は、山田の娘が弥三郎の女房に憑依し、弥三郎の不実な行いを口ばしる。霊が憑依し、ある者の悪事を他者に向かって口ばしる話型は、『死霊解脱物語聞書』（元禄三年（一六九〇）刊）に認められる。作者

は主人公祐天上人の弟子と思われる残寿という僧侶で、祐天上人の口述をそのまま筆記しているようである。同書では、菊に取り憑いた累の霊が夫の悪事を口ばしる。10の本文は途中で切れており、結末は不明だが、口ばしりを聞いたあとで、珂碩は恐らく霊を済度させ、女房は回復したのであろう。

『死霊解脱物語聞書』とほぼ同時代に成立した『名号威徳物語』には、口ばしりによる悪事暴露に類する説話は見られず、大分時代を隔てて成立したと思われる本書に採用されているのは興味深い。余談だが、三遊亭円朝の長編落語『怪談牡丹燈籠』にも、口ばしりによる悪事暴露はとり入れられている。夫に殺されたおみねの霊が使用人に次々に取り憑いて、殺害時の様子を口ばしる。

### 四 寺宝にまつわる話

4と9は、浄真寺の寺宝の由来を記す。浄真寺には、珂憶が寄進した宝物が多くある。4の「芝枯の名号」は不思議な宝物で、虫干しの際、芝の上に広げると文字通りに芝が枯れると紹介されている。「十三間」と具体的な大きさが示されている。この「芝枯の名号」は、『九品山縁起』<sup>5</sup>（文化九年（一八一二）跋刊）の「宝物目録」の冒頭に「芝枯大名号」と載せられているが、由来については記されていない。「芝枯の名号」は現存し、浄真寺の虫干法要の際には、境内で干されるとい

う。9では、智証大師の真筆の掛絵が寺の宝物になった経緯が語られて

いる。8の説話は、内容的にいかにも唐突な印象がぬぐえないが、9を読むと、その意味が判明する。和泉式部の歌徳説話は、寺宝由来譚の前提であったことがわかるのである。

和泉式部の塚を守っていた勢州奥山家の子孫の不信心は、娘の病気を招き、塚の神に取り憑かれた娘が、仏の信仰と念仏を勧める。珂碩が法要を執り行い、夫婦は一日に一万遍念仏を唱えるようになり、娘は珂碩より十念を授かる。娘は完治し、家業は繁昌した。珂碩の徳を感じた奥山家は、家伝来の智証大師の真筆の掛絵を、珂碩に寄進し、浄真寺に伝わっているというのである。

9は、下巻の他の説話に比べると、比較的分量が多い。浄真寺の宝物由来譚にかなり筆を費やしている印象である。なお、この掛絵は、『九品山縁起』の「宝物目録」には記載がない。浄真寺に現存するかどうか、未確認である。

## 五 和泉式部の説話

和泉式部の説話は数多く伝わっているが、『珂碩上人伝記』所収の8の説話は、特異なものである。例えば、娘の小式部内侍は臨終の際、「如何にせんゆくへきかたもおもふへす親に先たつ道を知らねば」という和歌を詠むが、『十訓抄』<sup>6</sup>十ノ十四では「いかにせむいくべき方をおもほえず親に先だつ道を知らねば」、「沙石集」<sup>7</sup>巻第五末ノ二では「いかにせむいくべき方もおほはず親に先立つ道を知らねば」と詠み、ともに神が和歌に感心し、小式部内侍の病気が治る結果となっ

ている。本書では、類歌を記しながらも、小式部内侍は亡くなってしまふのである。よってこの箇所は、歌徳説話ではなくなってしまうている。

また、本書では、小式部内侍が亡くなった年齢を、わずか六歳としている。『古本説話集』<sup>8</sup>上七には「和泉式部が女、小式部の内侍せにければ、その子どもを見て…」とあり、『宝物集』七巻本巻第一には「上東門院の女房に和泉式部と云者あり。其むすめに、小式部内侍とて、いみじく時めく人ありけり……万の人、心をつくし、思ひをかけたけり共、御子静円僧正など出来給ひ、おもくめでたくて過ける程に、はかなく煩て程なく失にけり」とあり、いずれにおいても、小式部内侍は子どもをもうけた後で亡くなっている。

さらに本書では、小式部内侍が亡くなったあと、和泉式部は性空上人との対面を願って播磨国書写山に赴き、「暗きよりくらきに帰る此身をははるかに照らせ山の端の月」と詠み、性空上人は「日は入ぬ月はまた出ぬ頃なれば如何照らさん山の端のそら」と返す。さらに熊野権現は本地は阿弥陀如来だから、汝のような罪深い輩は折れば利益を蒙ることができると教える。和泉式部が詠んだ「暗きより……」は、『拾遺和歌集』<sup>10</sup>巻第二十・哀傷では、「性空上人のもとに、詠みて遣はしける」という詞書があり、「暗より暗道にぞ入ぬべき遙かに照せ山の葉の月」という歌であった。『古本説話集』では、『拾遺和歌集』所収歌が記され、性空上人の返歌はなく、代わりに袈裟を与えられる。和泉式部はその袈裟を着て臨終を迎え、あの世で助かったとする。『無名草子』<sup>11</sup>も同じ歌、同様の展開で、『古本説話集』と『無名草子』は、

共に罪深い女性の代表である和泉式部が、優れた和歌の歌徳によって往生をとげた歌徳説話となっている。本書では、「暗きより……」の和歌を詠んだことよって、性空上人から熊野への参詣を勧められ、京都の誓願寺での得度へと進んでいる。

和歌の力で得度がなかったという意味においては、これも歌徳説話と考えると良いのかもしれないが、①性空上人を訪問し、和歌を詠む、②袈裟を与えられる、③袈裟を着て臨終を迎え、あの世で助かる、という女人往生の話型とはなっていない。類歌を用いながら、全く結末が異なる説話になっている。『古本説話集』と『無名草子』は往生を語る話型だが、『珂碩上人伝記』は出家への道筋を示す話型と言えよう。

### おわりに

ここまで書いてきた内容をふり返ってみたい。

浄念寺所蔵の『珂碩上人伝記』下巻は、1から3は、珂碩の奥沢での日常を記し、4から7は、浄真寺の伽藍造立にまつわる話、8から10は勢州山田と関わる話である。主題は様々だが、どの話にも根底には珂碩の法力の素晴らしさと、それを称揚する意図が認められる。

また、浄真寺の伽藍造営にまつわる話は、二世珂憶による尽力や、珂憶と尾張徳川家二代光友との交流の様がうかがえる内容となっている。『珂碩上人伝記』と題しながらも、二世珂憶の業績を顕彰する意識が働いたように思われる。

憑依された者が神霊の言葉を口ばしする話は、9と10の二話が収めら

れている。そのうち9は神霊の願い通りに弔いを行うと憑依された者が回復するという内容で、本書中巻や『名号威徳物語』下巻にも同様の話が収められている。他方、10のように神霊が憑依して悪事を暴露するという話型は、本書の他の説話にも、『名号威徳物語』にも見受けられなかった。しかし、同様の話型は、既に元禄三年刊の『死霊解脱物語聞書』に認められるのであった。

寺宝由来譚は4と9の二話である。4の寺宝は現存し、現在の信仰、年中行事にもつながる。他方、9の掛絵現存は、未確認である。

また、8の和泉式部の説話は、『十訓抄』や『沙石集』、『古本説話集』などに収められた歌徳説話とはまるで異なる展開を見せる。類歌を用いながら、女人往生譚ではなく、出家への道筋を示す話型へと転換されているのである。

### 注

- (1) 世田谷区教育委員会、一九九〇年。
- (2) 拙稿「浄念寺蔵『珂碩上人伝記』に見える奇瑞譚―中巻を中心に―」(『中京大学国際教養学部論叢』第八巻第二号、二〇一六年)。
- (3) 本稿では浄真寺蔵本を用いるが、ほかに龍谷大、大正大、東北大等も蔵する。引用にあたっては、原漢文を書き下し、私の句読点を加えた。
- (4) 拙稿「『名号威徳物語』解題・翻刻」(『書物・出版と社会変容』第一八号、二〇一五年)参照。
- (5) 国会図書館蔵本(二二九―二二四)による。
- (6) 『新編日本古典文学全集五一 十訓抄』(小学館、一九九七年)所収。
- (7) 『新編日本古典文学全集五二 沙石集』(小学館、二〇〇一年)所収。
- (8) 『新日本古典文学大系四二 宇治拾遺物語 古本説話集』(岩波書店、

- 一九九〇年) 所収。  
 (9) 『新日本古典文学大系四〇 宝物集 閑居友 比良山古人霊託』(岩波書店、一九九三年) 所収。  
 (10) 『新日本古典文学大系七 拾遺和歌集』(岩波書店、一九九〇年) 所収。  
 (11) 『新潮日本古典集成七 無名草子』(新潮社、一九七六年) 所収。

### 付記

貴重な資料の閲覧と撮影をご快諾くださった、快樂山浄念寺のご住職、井口信道上人と、九品山浄真寺のご住職、清水英碩上人に、心より御礼申し上げます。

